

1988. 3

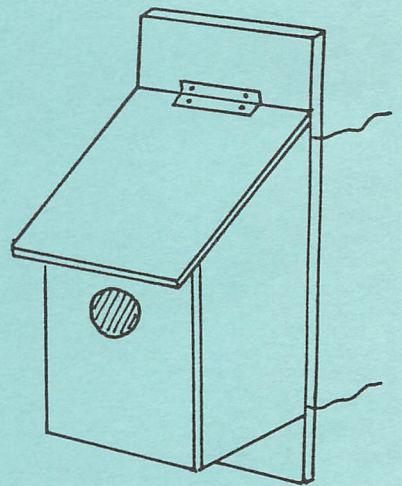
# 愛鳥教育

NO. 25・26合併号

全国愛鳥教育研究会

## 目 次

巻頭言	金井郁夫	3
遺稿「日本愛鳥教育視察団の中国訪問記 報告」	下田澄子	4
追悼文	金井郁夫、栗原 仁	8
〃	梅本 登、杉村千恵子	9
常務理事会報告	金井郁夫	10
夏期研修会のお知らせ	杉浦嘉雄	11
北海道支部だより、愛鳥教育実践記録集第2号		12
実践記録のお知らせ「自然教育運動の軌跡(その一)」		13
第22回実績発表大会を審査して	竹下信雄	14
編集後記		15
第22回全国鳥獣保護実績発表大会報告書	(別冊付録)	



# 巻 頭 言

副会長 金井郁夫

会員の皆様方の中には既にお聞きおよびの方々もいらっしゃることと思いますが、ここで改めてお知らせ申し上げます。

会長下田澄子先生は、1988年2月27日夜半、心不全症にて御逝去なさいました。行年64才でした。ここで会員と共に心からなる哀悼の意を表したいと思います。合掌。

故下田先生は、昭和55年の愛鳥教育研究会発足以来、本会活動のけん引的存在として6年間、さらに会長とし1年有余、多方面にわたって全国愛鳥教育研究会の歴史を築いて来られました。それ等の内容については、皆様が御承知の通りです。

創刊以来24号の「愛鳥教育」を調べてみますと、故下田先生の麗筆は巻頭言4回を含めて25編にもぼっています。

こうした偉大な先駆者を失った今、全国愛鳥教育研究会は危急存亡の時を迎えていると言っても過言ではありません。私とて創立以来の一会員に過ぎなかったのですが、急拠、副会長の重任をおおせつかって1年7箇月、故下田会長への協力も軌道にのりかけた時の急逝で困惑しております。

とは言いましても、全国には400人からの会員

がおられ、それぞれの実績をあげて活躍していらっしゃいます。そして、そうした業績の一つが、全国鳥獣保護実績発表大会へと集約されています。こうした頼もしい背景をエネルギー源とし、今後の新展開をはかることが急務であると考えております。

「愛鳥教育」創刊第1号の巻頭言に田村前会長は、次のようにお書きになりました。

「一人の英雄に希望を託す時代ではなく、多くの人の智恵を結集し、(中略)自然環境にかかわる問題は、そこに住む、ひとりひとりの人の考えや行動にゆだねられている。」この原点に立ち帰って会を運営してゆくのがよいと考え、常務理事の方々と打ち合せを進めております。さらに日本鳥類保護連盟からの御指導をも受け、会員の皆様からの提言と発表を強力な武器として新境地をひらく所存であります。会の事業も共通テーマによる各地調査を実施するとか、いろいろな展開が考えられます。また、自然教育短報、ハガキ通信等紙面を開放した機関誌づくりも検討してみたいと思います。会の運営に関する積極的な御意見をお寄せ下さい。お待ちしております。

# 遺稿日本愛鳥教育視察団の中国訪問報告

全国愛鳥教育研究会会長 下田澄子

## はじめに

実に広々とした雄大な大自然、延々と真っ直ぐに続く道路と並木、地平線が見えた畑や葦などの草原、大丰县での満天の星空、揚子江のへりによる渡河、目を閉じると浮かぶ中国の姿である。

上海市、南京市、塩城市を結ぶ江蘇省二千軒のバスの旅では、たくましく生々とした人達、農業用耕耘機を兼ねる運搬車、そして実に多い自転車が目立っていたが、日本に見られるこせこせした様子がなく、悠々としていたことが印象的だった。

しかし何よりも、この長い旅に、寝食を共にされ、つつい出してしまう私達の要求や甘えまでも常に快く受け入れられ、的確に対処され、より快適な旅に、より充実した視察や交流が行われるようにと、ご尽力くださった、陸さん、張さん、曾さんのご厚情は、終生忘れることのできないことと、唯々感謝の気持ちでいっぱいである。

また南京テレビ局の王順南さんを始め、行く先々で、熱意あふれる自然保護へのお考えをお話され、実際のご活動の様子をお見せ頂き、その上すばらしい中国料理で、身に余る歓待をして下さった、中国の要人の方々のご芳情には、厚く御礼申し上げます次第である。

なお自分の不注意から怪我をし、十分全快しないままに参加し、そのため同行の津戸団長、江原連盟事務局長、細谷愛研副会長、大島さんに、何かとご心配をおかけしたり、ご親切なご援助を頂いたことも、何とも申しわけなく、同時に深く感謝申し上げている。

## 1、愛鳥文流会議における日本の愛鳥教育についての説明要旨

(註：上記については、限られた時間での説明と通訳されるという点から、連盟の杉浦愛鳥主任より学習指導要領の理科編の中から生物に関係する項目を抜粋したものを中国側に送付されていたが、説明時間の制限より、理科の生物教材には植物や野鳥以外の動物が多く取り上げら

れている実情と、学校では、愛鳥活動は、特別活動や自由裁量の時間で行なっている例が多いので、それらの実践活動を中心にお話した。幸いなことに、通訳の張さんは、豊橋市の桜丘高校教諭のご経験をお持ちであり、事前の打ち合わせで、十分ご了解頂いたので、印刷物からはなれて説明することができたのである。

なお印刷物については、5月に中国側より来日の際、「そのことは法律できめてあるので」というご説明がしばしばあった関係上、連盟の杉浦愛鳥主任が、ご多忙中、愛鳥活動と法的根拠について明らかにしていく視点で作業して下さいましたが、それを十分生かすことができなかったのは、他教科、特活、学校行事等でも愛鳥活動の教材化が課題である事と、通訳の入る説明時間について、十分な理解が持てず、その上怪我など突発的なこともあって、自分自身の説明のための原稿提出ができなかった事について、改めておわび申し上げたい。

ところで、愛鳥教育交流会議においては、最初に愛鳥モデル校の制度について説明し、次に全国愛鳥教育研究会の性格と仕事、連盟との関連について話をした。

愛鳥教育を学校に取り入れていることについては、文部省の小学校学習指導要領の理科の目標に「観察・実験などを通して、自然を調べる能力と態度を育てるとともに、自然の事物・現象についての理解を図り、自然を愛する豊かな心情を培う」とあることに、現在は中心をおき準拠し、その教材化に努力している。しかし、野鳥の観察を授業として取り上げることには、多くの困難、課題をかかえ鋭意研究中である。しかし、根気よく繰り返し野鳥と接するその中から、子ども達は、野鳥に関心を持つようになり、野鳥が好きになり、野鳥の名前や種類や生態について理解を深め、自然愛護の大切さを感じていくというようになってきている。そして、更にきびしい自然の中で営々として生きる野鳥の姿から、特に親鳥がヒナを育てる苦

労や、巢立つ直前に天敵にヒナがとられてしまうなどの事実にもふれ、今の子どもが、自制心や耐える心に弱い点が主体的に矯正されていく効果等が、児童の作文等からみとめられていることや、優しい思いやりの心が育っていくこと、問題意識をもって自然をみつめ、科学的な見方、考え方、取り扱い方を育てるのに、この愛鳥教育の役割は大きいと考えていることなどについて説明した。

(註 なお引き続き、この時学年別の愛鳥活動の実践について説明したが、このことは誌面の都合もあると考えられるので、全国愛鳥教育研究会の機関誌「愛鳥教育」に掲載させて頂くことにした。)

## 2、瑞金北村小学校の訪問記

この日も日程がつまっていた関係から、この学校への到着は、約束の時刻よりかなりおくれてしまった。もう生徒は多分帰ってしまって、施設等の見学と説明になるのではと思って行ったところ先ず驚いてしまった。校門から玄関まで、寒い中を子ども達がずらりとならび、美しい色のスカーフを盛んに振って大歓迎をしてくれたのである。「歓迎、歓迎」と口々に大きな声で言っているのであるが、(通訳の方に伺ってわかったことである)それが私の耳には「ファーイン?フハイン?」ときこえ、「立派、立派」と言われているように勝手に解釈し、とたんにはずかしくなって困った。どの子どもも眼がきれいに澄んで、ほおが赤く、口を無邪気に大きくあけ、スカーフをひたむきに振って私達に呼びかけてくれる。その純真なかわいい姿に、私達はとまどいながらも感動して思わず「ありがとう」「今日は」「元気ね」と連発した。この子ども達のトンネルを通ったが、大鳥さんを除いては、一寸地味な人すぎて、美しい絵になりそこなったと思われ、子ども達にすまない感じもした。

校内や教室をまわり、一つの比較的大きな部屋で、子ども達が椅子にかけて待っていてくれたが

その前方に私達の椅子をおき、かわるがわるに前に出て、暖かい雰囲気演技をしてくれた。そして目立ったことは、女の子は無論、男の子まで、ほお紅や口紅をつけていたことで「京劇などの影響では」など話しながら楽しく見せていただいた。

合唱は、きちんとならんで澄んだ声で、初めに中国語の歌をうたい、次に日本の歌という説明で「母さんが夜なべをして手袋あんでくれた」の歌がうたわれた。今何人のお母さんが、こんな風に子どもに接していているかと一寸気がかりにもなりながらその歌をきいた。そのあと小さい子が、ひとりでアコーディオンをひき、次に子どもが自作したと思われる野鳥の指人形で、ある野鳥が家を新築し、林の中の野鳥が皆でよろこんでお祝いをするといった物語の劇を見せて頂いた。

中国の他の学校もそのようであったが、野鳥に親しむ方法として、このように音楽や、舞踊や、絵や書などで、関心を高め、野鳥に親しませようとしていることが特に目立って感じられた。

この点について、私達ももっと学び、取り入れていくようにすることを考えていきたいと思った。

以上のようにこの学校では、子ども達と直接の交流ができ、大変うれしかったが、外に出てみると、かなりの時間が経過しているのにかかわらず、到着した時と同じように生徒がぎっしりならんで声をかけ見送ってくれたのである。本当にそれは寒い日であっただけに、何とも言えない感激であった。

## 3、大余小学校の愛鳥教育についての主張

(註：これは、大余小学校より提案された印刷物の一部を、最近の中国の文字になやまされながら、中国語辞典を頼りに翻訳したものである。「産」という字が「J」。「無」という字が「元」という調子で、全く昔と違っている字が多いので、苦労は多かったが、あるいは、間違いもあるので、不安であるが、意識の点で筋が通っているように思われるので、発表することにし

た。誤りについてはお許し頂くようお願いする。)

#### 愛益虫鳥獣唱議書(愿全球鳥語花香)

上記の見出しが書かれているが、これは、益虫鳥獣愛護の提唱書、(全地球に鳥語り花香のように)と訳せた。内容は、次に訳文のみ載せる。

益虫・鳥・獣等の野生の動物は、人類の朋友であり、大自然の重要な組成部分で、社会の三宝の一つで、大切な生物資源です。またこれらの資源を合理的に利用することは、生態の平衡を維持擁護し、自然環境を美化し、人間の文化生活を豊富にして、農・林・牧の副業の持続発展を保護促進します。科学の研究や教育・文化・医薬・衛生等の方面でも、特別重要な意義があります。このことは国際的にも、一国家や地区の自然環境・科学文化及び社会文明の進歩をはかる重要な指標の一つとしてとらえられております。

しかしながら近年来、乱打濫獲により、生態環境を破壊する色々な原因がつけられています。ためになる珍しい虫や鳥獣たちは、少なからず絶滅の境地に追いこまれています。猫頭鷹(ミミズク)を例としますと、一羽の猫頭鷹は、一夏の間数千の鼠をとって食べ、人類のため多量の糧食を保護します。10数年前には、我が国の郷村には、この鳥が常に出現しましたが、現在見ることは、非常にむずかしくなりました。すでに絶滅の危機に頻しています。丹頂鶴、啄木鳥(キツツキ)喜鵲(カササギ)黄鼠狼(イタチ)螳螂(カマキリ)無毒の蛇類等もまた相似した境遇におかれています。益虫鳥獣を保護して絶滅しないようにし、更には不断に増殖更新して、人類のため永く利用し、しあわせを作り出していきたい。

私達学生全体は、全世界各国の友人に提唱します。「愛護益虫鳥獣活動」を積極的に展開し、国は益虫鳥獣の種類、数量、功能、貢献等の調査を実施し、有効な保護施策を採用し、乱打濫獲を厳禁し、益虫鳥獣の愛護にかかわるすぐれた人や行事を表彰し、ひとりひとり、各人は毎年、益虫鳥獣

のためのよいことを一件以上行ない、好条件の所では、各人が益虫鳥獣の巣を守り育てることで。

この活動を展開することは、我等総ての学童が科学を学習し、第二の教室を開き、また一つの溝を打開して新たな段階に進み、少年達が大自然を熱愛する情操を陶冶し、人類の科学や技術の機能を培養するため有利なことです。

親愛なる皆さん、急ぎ行動を起こし、来りて共に、益虫鳥獣保護のために貢献し、全地球が繁栄隆昌し、鳥語り花香のところになるようお願いしよう。

中国江蘇省睢宁县邱集郷大余小学全体学生  
(朱以助 執筆)

#### ○おわりに

今回訪中させて頂き、多くのことを見聞し、また今までと違った角度で、愛鳥教育について考える課題を持った。また特に現在の自然保護の概念が、日常生活の中でどのように実践され、社会の人にどう考えてもらったらよいのかという、問題意識を深められた思いである。

広大な自然環境の中国がうらやましく、何かと人間の生活と自然との接点に困難がでてしまう日本では、とにかく追いつめられている現実問題から逃げきれない息苦しさを感ずる。

なお今回の旅行の報告の分担では、私は交流会議への発表内容と、訪問した小学校を責任範囲と考えていたが、瑞金北村小学校は、直接児童と接触し、子ども達から大変な歓迎を受け非常に印象が強かったということで書かせて頂いた。

また大余小については、朱さんが、大余小が、私達の行動するコースから、はるかに離れていたということで、児童の作品を蘇州中学校まで、わざわざ持ってこられ、一教室借りられて、展示会のように、児童の絵や書や作品をかざられ、いろいろ説明をして下さり、また南京の交流会議でも、活気あふれるご発表をされ、印刷物等頂いたもので、それを日本文にし掲載させて頂いた。

他の学校でも、校内をご案内頂いたり、お話を

伺ったり、お茶や果物などおもてなしをして下さったりで、多くを学ばせて頂いたが、中学校と同一の場所であったり、中学校は細谷副会長の担当とお約束もしてあるので、上記二つの学校を取り上げさせて頂いたのである。

誌面の制約もあり、何よりも私が中国語がまるきりわからないため、思うようにご紹介できないことを深くおわびする次第である。

#### 下田澄子先生 御逝去

当研究会会長で、日本鳥類保護連盟評議員でもあられる下田澄子先生が、昭和63年2月27日夜半、心不全症で亡くなりました。享年64歳でした。

下田先生は、昭和17年東京府西多摩郡三田国民学校に就任されて以来今日に至るまで学校教育はもちろんのこと広く社会教育にも貢献されてこられました。そのなかでも、愛鳥教育へのご貢献は特に顕著なものでした。

昭和46年下田先生は、東京都戸倉小学校校長に就任されましたが、昭和49年全国鳥獣保護実績発表大会には、文部大臣奨励賞受賞。昭和54年には同環境庁長官賞受賞と、つねに戸倉小は国愛鳥モデル校のリーダー的役割を果たしてきました。

先生自身も、昭和50年5月の愛鳥週間「全国国野鳥保護のつどい」にて環境庁長官賞受賞、昭和54年には同、連盟総裁賞を受賞され、同年

には、愛鳥教育研究会を発足される等のご活躍ぶりでした。そしてお亡くなりになる当日も、愛鳥教育の原稿を書いておられた程でまさに生涯を愛鳥教育にかけられたと言っても過言ではありません。

当研究会では、御遺族の方と相談の上、その遺稿を「愛鳥教育」に掲載する計画です。

なお、本稿は、先生ご自身より「とりあえず書き下した文章をお送りします。その後に整理したものをだしますが、あなた（杉浦）の意見も聞かせて下さい」というお言葉を伺い、受けとったものですが、充分価値のあるものですので、そのまま掲載させていただきましたことをおことわりしておきます。

先生の御意志を重んじ、より一層会の発展に努力していきたく思っております。

謹しんでご冥福をお祈り申し上げます。

常務理事 杉浦嘉雄記

# 追悼文

## 青梅育ち

東京都高尾自然科学博物館  
全国愛鳥教育研究会副会長 金井郁夫

故下田澄子会長が育ったのは、山紫水明で知られる東京府（都）西多摩郡青梅町（市）勝沼と聞いている。そして進学先が町の西端にある府立第九高等女学校（都立多摩高校）から女子師範とか。

私も青梅生れで、17才まで同町天ヶ瀬（第九高女の南麓）にいた。小さい頃は女学校のグラウンドの端で遊んでいたし、小学校は青梅駅北にあり、そこへ通う時には通学する女学生の間をすり抜けてたりして彼女等を驚かしながら行くのが朝の楽しみでもあった。そうしてすれ違った女学生の中に、下田先生もいたことと思う。

私も八王子市立浅川中学校に勤務していた昭和42年に、初期の愛鳥モデル校の指定を受け、生徒と高尾山界わいの野鳥調査や巣箱かけをやって、都代表で発表はしたものの選外であった。その後五日市町の愛鳥活動が著名になり、下田先生の手腕に感腹し、教えを請わねばと考えていた。

そして昭和54年に、田村前会長、下田先生、柳沢紀夫さん、柴田敏隆さんあたりの胆いりで愛鳥教育研究会が発足し、発足総会で下田先生にお会いして初めての会談となりました。その後10年ちかくは紙面で消息を知るだけでしたが、田村先生の退任に伴い、私も下田会長のお手伝いをする事になり、年数回は顔合せとなり、その企画、行動、発想、執筆等のちからは圧倒されました。

一緒に仕事をしてから1年余り、やっと考えかたや行動を共にする機運が熟してきた時の御逝去は痛恨のきわみです。今までの御教示の心を汲みとり、その主旨を最大限に生かすよう、暗中模索ながら努力してゆきたいと念じております。

1988、3、1、告別式の日

## 下田会長のご逝去を悼む

福生市立福生第四小学校教諭  
常務理事 栗原 仁

ひと昔ほど前、下田先生が戸倉小校長時代のことです。私は先生と同じ西多摩地区の小学校に勤め、しかも一愛鳥モデル校であり、理科部にも所属していましたから、先生から愛鳥教育や理科教育について、その理想や構想を伺うことがありました。

下田先生は、大先輩ですし、まして女校長さんということで、私は親しくお話しするどころか、たまにお会いすることがあれば、常に話しの聞き役、うなずき役でした。

「どうですか」「賛成できますか」「子どものためにやってね」「地区のためにね」「考えておいてね」「入会しない」「調べてみない」

「書いてね」「力をかしてね」「応援してね」など、ぼんぼんと言葉がとび出すのです。

ものぐさで、なかなか腰を上げない私ですが、いつの間にか、うまく乗せられてしまうことがあります。情熱的で人情あふれる心あたたかな、そんな下田先生のお人柄が忍ばれてなりません。

愛鳥教育研究会については、会員の皆様の期待に応えるべく大きく発展させていく大切な時に下田会長が逝かれ、大きな柱を失ってしまいました。途方に暮れてもいられません。私も、いつまでも、常務理事見習いなどといっていられなくなりました。役割りが果せるよう努力して参ります。

愛鳥教育研究会が着実に発展できますよう、会員の皆様のお知恵を借してください。応援してください。

最後に、下田先生安らかに眠りください。



## 下田澄子先生を 悼んで

日の出町立大久野小学校教頭  
常務理事 梅本 登

先生の突然の訃報に接し、まさに呆然自失という心境です。

先生と私の出会いは、昭和41年春、私が入院をしていた時のことでした。羽村東小学校の教頭として赴任され、わざわざ、そのご挨拶に病院まで足を運んで下さったのです。今でも、若さあふれたお姿が目にはっきりと浮かんで参ります。

以来、羽村東小学校で3年間、戸倉小学校では校長先生として8年間お世話になり、いろいろとご指導をいただきました。

先生は、戸倉小学校に校長として赴任されて以来、一貫して理科教育に力を注いでこられました。愛鳥教育活動もその中の一手だてとして、自然に働きかけ、自然から学んでいく子どもたちを育てるのに最良の方法であると考え、取り組んできたわけです。先生が書かれた文章の中に、「自然の美しさ、厳しさ、はかなさを感得させ……」という一節がありますが、忘れることができません。

従って、愛鳥活動を、教育課程の中にしっかり位置づけ、全校で活動を進めることが、先生の願いでありました。各学年の発達段階に応じて、野鳥という素材を教材化し、環境との関わりについて理解させていくことに力を注いでこられました。

その結果、49年、文部大臣賞、54年、環境庁長官賞、56年、文部大臣賞を受賞されたわけです。

先生は、私どもが驚くほどエネルギーであり、実践的に生活をされていました。大蔵省や日本銀行から、戸倉小学校が、数多くの表彰を受けているのも先生のご功績によります。

愛鳥教育研究会もその巾広い活動の中の一つとして、ライフワークのように考えて進めてこられました。先生の突然の訃報は、今後の会の運営にとって筆舌に尽し難いほどの痛手でございます。

しかしながら、理事一同、何とか努力をいたしまして、先生のご遺志に報いたいと存じます。

どうぞ安らかにねむり下さい。

## 下田先生のご逝去 悼んで

世田谷区立船橋小学校  
常務理事 杉村 千恵子

あまりに突然のことで、まだ下田先生が鬼籍に入られたとは信じられません。いつも、我々の先頭を切って、「あれもしよう。これもしたら。」と引っぱって下さった存在が大きかったから。

下田先生に初めてお目にかかったのは、昭和57年度校内研究の講師として来校された時だと思えます。

その時先生は、「船橋小も、もうちょっとだと思え」と述べられ、励まして下さいました。

その後、愛鳥研の夏季研修会（御岳）に参加し同室で休ませていただいた事も、なつかしい思い出です。その後、石橋氏の後を受け常務理事となり、常務理事会や総会で、先生にお会いするようになりました。

文字通り愛鳥研を創設され、推進されて来た下田先生。私達は、先生のバイタリティとファイトにいつも圧倒されていました。

「とても我慢強い方でした」と亡くなって気付く程、自分に厳しい先生でした。

どうやって会員をふやすか、赤字をかかえてどうするか等々、先生の悩みは今日、残された我々の仕事となっています。

先生亡き後、愛鳥研がどのような道をたどるか、愛鳥研の分岐点です。残された者達の課題といえるでしょう。

# 常務理事会報告

- 1 日時：昭和63年2月6日(土)15:00~18:00
- 2 場所：(財)日本鳥類保護連盟事務局にて
- 3 参加者：下田会長、金井副会長、梅本、栗原、長屋、杉村、杉浦（以上常務理事）、徳竹理事、以上8名

## 4 議題

- (1)会誌「愛鳥教育」について①編集 ②発刊回数 ③発送
- (2)来年度行事について①理事（編集）会 ②研修会
- (3)今後の運営について①自主運営化へ ②研修の充実 ③会員増加と会費納入 ④編集委員増強

## 5 経過報告

(1)会誌「愛鳥教育」の編集については今まで杉浦常務理事が主となってやっていたがこれからは常務理事複数による分担制をとることにした。担当は…

昭和63年度1号7月刊・5、6月準備・杉田、杉浦、同2号10月刊・杉村、長屋、同3号1月刊下田、金井、同4号3月刊・梅本、栗原である。なお編集や発送を能率化するため新しく編集委員を募集する。発送に際しては役員その他、会員のボランティアを募集する。

年間の発刊回数は今のところ4回であるが、編集時間や経費節約のため合併号とすることもあり得る。できれば、自然環境を授業に生かした実践報告等をより多く掲載したい。

(2)常務理事会は原則として偶数月の第2月曜日の午後を中心に以下のように決定した。4/23、6/11、8/10（水・総会）、10/11(火)、12/12 2/13。

研修の充実は当面のテーマとして内外から要望されているところである。さしあたっては魅力ある内容で参加者の増加をはかりたいものである。昭和63年6月18日、19日の研修会は山梨富士見高原を主候補地として次に富士山麓を考えることになった。8月10日の総会は希望者も多いので、千

葉県我孫子市の山階鳥類研究所でおこなわれる予定とした。

(3)今後の運営については基本方針でもあるため白熱した論議が展開された。自主的運営への道を考える最大ポイントは財政である。その裏付けは会費納入、そして全会員の年度始め納入が必須となる。現状は毎年未納入者が何名かおり、納入も年度後半になり、会誌発刊ごとに資金ぐりに悩むことになるからぜひとも前納制を徹底したいもの。そして会員の増加が経済面へのゆとりにつながり、会誌の質的向上、研修の充実と三本の柱が確立すれば文部省や環境庁への発言力も強められるという意見もでた。

財政や庶務で日本鳥類保護連盟に依存している面を改正してゆく方向が望ましい、とも考えられるが革新（進歩）的意見としては愛鳥教育研究会を日本鳥類保護連盟の愛鳥教育委員会として改変したらどうか、との意見もあった。

会の内的充足をはかるか、対外的に啓蒙運動を盛りあげてみるべきではなからうか、との対立的論議もなされたが、外への行動は連盟にまかせるとして、愛鳥教育研究会は、主に愛鳥モデル校に携さわったり、愛鳥教育に関心のある人びとの参加、研修、発表活動を盛んにして内部確立をはかるのが急務との結論を出し、次回その具体的方策を討論することに決めた。

さらに、地方行政機関への働きかけをするため「愛鳥号」の活用を考えてみる必要があるとの意見もだされた。最後に文部省への提言資料として、各地の河原及び河原で見られる野鳥、をまとめるための調査を各地で実施されることを切望して筆を止める。東京都の資料は近いうちに常務理事会の方でまとめたものをサンプル例として発表する計画です。

(金井郁夫記)

# ——昭和63年度夏期研修会のお知らせ——

自然の宝庫、中部山麓、富士見高原で思いっきり野鳥のさえずりに耳を傾けてみませんか。

【1988年6月18(土)夕方から19(日)お昼まで】

場所：長野県諏訪郡富士見高原

日時：1988年6月18日(土)5時(「ヒルサイドホテル」集合)

6月19日(日)11時30分(同ホテルにて解散、ただし、富士見駅まで行く方は、同ホテルより専用バスが無料で出ます。)

宿泊：ヒルサイドホテル

〒399-02長野県諏訪郡富士見町立沢1-1182

☎0266(66)2111

参加費：1人10,000円(宿泊代・資料代・保険代等、往復の交通費は除く)

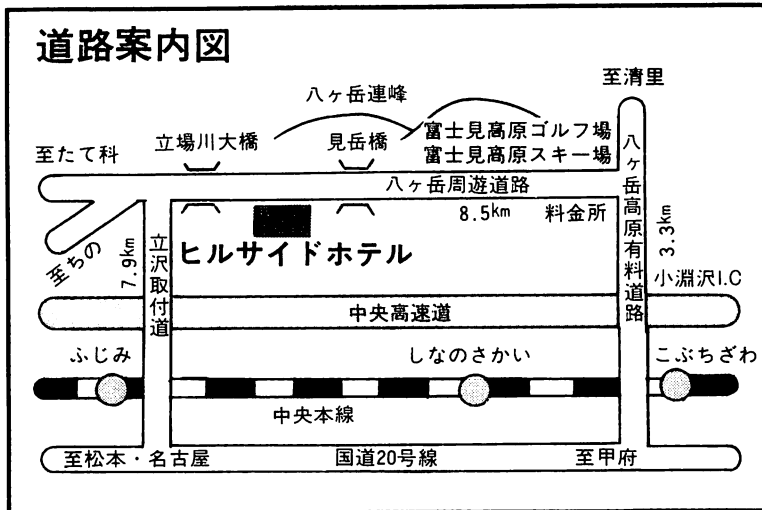
定員：25人まで

申し込み方法：6月1日(木)までに申し込み金5,000円を郵便振替(東京2-92041、愛鳥教育研究会)または現金書留(〒150 東京都渋谷区宇田川町37-10-405(財)日本鳥類保護連盟内愛研事務局宛)にて「夏期研修会申し込み金」と明記の上お送り下さい。

内容：野鳥観察(オオルリ・キビタキ・クロツグミ・アカゲラ・アカハラ・マミジロ・カッコウ・ホトトギス・ツツドリ・コガラ・ヒガラ等、数多くの夏鳥・留鳥のさえずりを中心にバードウォッチングをします。)

その他、日仏愛鳥教育交流のビデオとお話。夜のバードウォッチングも企画しております。

※雨天の場合でも実施致しますのであらかじめご了承下さい。



# 同支部愛鳥教育実践記録集

## 第2号「丹頂」について

北海道は、愛鳥教育実践が活発な自治体として有名ですが、その中心の一つが、全国愛鳥教育研究会北海道支部(以下愛鳥教研道支部と呼びます)です。

昨年末には、同支部の実践記録集第2号「丹頂」を発刊しました。すばらしい実践集です。詳しくは、下記の道支部事務局までお問合せ下さい。

ご参考までに記録集(丹頂)の目次および同支部長、水崎先生の発刊に寄せた文章を掲載させていただきます。

〈お問合せ先〉

〒004 札幌市豊平区里塚263番の5番地  
札幌市立三里塚小学校内 愛鳥教研道支部宛  
電話 011-881-2437番

### ◆目次◆

実践記録第2号発刊によせて	2
昭和62年度 野鳥絵画展	3
一人ひとりを高め 心豊かに活動する子供の育成	5
学田山案内	25
自然とのふれあい教育の中から	29
雨の日はバードウォッチング	33
向陽台小の活動	35
全校で探鳥遠足	43
小鳥の葬儀屋さん	44
「コムドリをきっかけに」	49
藤の沢小と小鳥の村	51
シジュウカラの巣箱観察	53
有明の自然をさぐる(野鳥)	58
防風林に学ぶ	63
愛鳥教育の芽生え	65
野鳥のお勉強会予定表	69
嵐山ビクター建設	70
会員名簿	71
編集後記	74

愛鳥教育実践記録集 第2号の発刊に寄せて  
愛鳥教研・道副支部長 水崎 満  
待ち望んでいた第2号が出来上がりました。

原稿をおよせ下さった会員の方々ほんとうにありがとうございました。

原稿の整理・運搬・入力・印刷・製本等作成の作業に汗を流して下さった幹事の方々、おつかれさまでした。

子供とともに歩む活動の様子を記した貴重な資料を多く寄せていただいたことは、たいへんうれしくありがたいことでした。

編集者たちは「たくさんの人から原稿が届くといいなあ」と首を長くして待っていました。でも「実践記録」というとなんとなくためらうのでしょうか。学術的で、格調高いもので、少しむずかしいコトバで、ちょっとかっこうのついたものでなければ、はずかしいなあと謙遜してしまう人が多いようです。(文章に書くのがめんどろだということもいますけれど)

読む人にとっては素朴で身近な記事ほど親しみを感じ、新鮮な感動と共感を覚えることがおおくあります。

みんなで作くり、みんなで育て続ける、みんなの記録集です。そのためにも、第1号で柳沢支部長が呼びかけた願い(こころ)をいつまでも生き生きと大事に守り育てていきたいと思うのです。

まず、会の結成にあたってのことばには、「きばらず気楽な会を・顔みしりがふえ、気軽に話し合えるように、実践者の活動を聞く機会、情報交流の場としてだれでも互いにはげましあい助けあい力になりあえるつながりをたいせつに」

そして、記録集については「会員の日ごろの雑談・語らいの中身が、そのまま文に移されるといい、出来上がったすばらしい研究を求めるのではない、今とりくんでいることをそのまま出しているだけでありたい。どんな小さな実践、ささやかな記録でも、愛鳥教育活動についての希望、意見、苦言、提言、悩みなども、とにかく会員のこころが通いあう場でありたい」ということばが聞こえてきます。「自然に親しみ、自然に学び、自然を護る」という活動がこの記録集からまた一つふくらんでいくことを願っています。

# ——愛鳥教育実践記録のお知らせ——

北海道における代表的自然保護教育者の一人、三浦二郎先生は、根室自然教育研究会の代表者であり、日本鳥類保護建盟の評議員でもられます。

先生の長年の自然保護教育活動の前半部のまとめというべき「自然教育運動の軌跡(その1)」がこの度、発刊されました。保護教育活動の資料としても、また、マニュアルとしても貴重なものです。ご参考までにこの記録集の目次を掲載させていただきます。購入ご希望の方は、下記にお申込み下さい。実費にてお分けいただけます。

1. 頒 価 送料共¥1,500
2. 申込先 〒059-12 苫小牧市樽前394-1003  
三浦二郎先生宛 または郵便振替  
小樽 3-12764 三浦二郎(敬称略)

「根室 その水の青 森の緑を(自然教育運動の軌跡その1)」申込様式

送付先 〒

氏名 部数 部

〒

氏名 部数 部

以上申込みます(頒価は同封 後送)

氏名

㊦

## 根室その水の青 森の緑を 自然教育運動の軌跡 その1 目次

- 1 はや書き・はじかきの弁
- 2 風蓮湖国際クラブゴルフ場造成問題 顛末記
- 21 子供にAnimal的感觉を
- 24 根室の自然保護をめぐる諸問題
- 44 脱「都会型理科教育」の実践をめざして
- 48 西別岳の1年—高山植物保護と教材性の探究—
- 60 小さな山でのささやかな保護活動
- 64 九州英彦山(ひこさん)登山記
- 67 水曲線
- 68 京都大学北海道演習林内 自然学習林指導手引
- 85 わが公宅の庭
- 86 野鳥を教材化する試み
- 92 主張 アマチュアリズムに徹するということ
- 94 根室の自然をめぐる諸問題

—教育とのかかわりを模索しつつ—

- 114 根室自然保護教育研究会のこれまでとこれから
- 116 写し・読むこと
- 117 北根室地方の古代文化  
本田克代(中標津町俣落中学校)
- 131 標津川湿原
- 133 根室標津「ポー川歴史自然公園」の湿原とその概要
- 138 野付の夏鴨
- 139 学校の近くに子供達の緑地を
- 140 風蓮川河口はツルの楽園  
—若い研究者からの提言について—
- 141 根室地方におけるタンチョウの生息状況
- 182 尾岱沼原野の野鳥  
—昭和52年春～夏の生息記録—
- 185 学校における自然保護教育と採集
- 188 エゾ……チシマ……ネムロ……
- 190 根室の自然保護の教師集団
- 196 小・中学校における自然保護教育
- 197 TERRA INCOGNITA (テラ・インコグニタ)
- 198 87分の1の場合  
シマアオジがさえずる環境の中での自然保護教育
- 200 郷土史をほりおこす  
—無定量の仕事のたのしみ—
- 201 「野付半島総合調査」にとりくむ根室自然保護教育研究会の活動
- 202 教材いっぱい野付半島
- 204 野付半島の四季
- 214 野付半島のタンチョウとオオハクチョウ
- 220 野付半島で発見したオオジュリンのアルビノ

# 第22回実績発表大会を審査して

日本鳥学会幹事・評議員 竹下 信雄

昭和41年に始まった全国鳥獣保護実績発表大会も数えて22回目、今年も日頃の努力をまとめた興味ぶかい発表を聞くことができた。全体のレベルは一段とあがったというのが、審査員一同の共通した感想であった。

都道府県から推薦のあった29校について、10月22日に書類での予備審査を行い、10校が入賞ときまり、この日の大会を迎えたわけである。今回は、高校と一般団体の出場がなく、この点はさびしかった。私見だが、今後は大学のクラブも参加できる道がひらかれると、大会がいっそう盛り上がると思う。

予備審査でひとつ議論があった。学校における愛鳥教育が目指す全人格的なかつ網羅的なものではなく、かなり狭い分野にしぼった活動をどう考えていくのかというむずかしい問題である。アマミノクロウサギの飼育と観察を続けてきた鹿児島県の大和小中学校がその代表的な例である。一応の結論としては、こうした限られた活動であっても、積極的に評価しようということになった。このことの背景として、愛鳥教育の目指す方向がさだまり、その実践方法も定石化されてきたので、この大会で、必ずしも愛鳥教育活動の本筋とはいえない活動が高く評価されたとしても、もはや愛鳥教育はゆるがない段階に達している、という判断があることを強調しておきたい。

静岡県島の島田第二小学校は、低学年の父兄からなる「しつけ学級」が活動の主体となっていることがユニークで、今後こうしたケースが増えるのかもしれないと感じた。活動の内容も活動の形も、ますます変化に富んでいくのであろう。ユニークといえば、中国の学校と文通を始めた学校も登場した。鳥獣への関心を仲立ちとしたこうした国際交流の成果が注目されるが、一方で、世界の人口が50億をこえ、飢えている人々も多いなかで、日本において鳥にえさを与えたりする行為にはどんな意味があるのか、といった問題からもこれから

は避けてとれないであろう。

発表の方法は、口頭での説明、スライド、OHP、テープレコーダーの使用など、ごく普通のもが多く、時間の制限もあることから、このあたりが標準となろうか。朗読だけでも、日常を思い浮かばせてくれることが可能とも思うが、あまりにたくさんのスライドを映写し、よく見る時間がなかった学校があったのは残念だった。1校の発表人数は、平均すると少しずつふえているようだ。せっかくの機会であるし、できるだけ多くの関係者が来場し、全国的な交流が広まるのも、この大会の効果のひとつである。旅費の補助など、いますこし主催者の配慮をお願いしておく。

なお、会場で一部の機器が不調で、発表の方々にご迷惑をおかけした。大会関係者のひとりとして、お詫びを申し上げます。



真剣な眼差しの発表風景

※受賞校および各学校の活動内容は、付録、昭和62年度全国鳥獣保護実績発表大会報告書をご覧ください。



スライド担当ももちろん一生懸命です。

## 編集後記

下田先生がお亡くなられ、ますます先生の陰日向のご協力が今さらながらわかった次第です。

かく言う、私自身も昭的63年度より、神奈川県丹沢山の鳥類調査担当となりましたが、この編集担当は続けて参ります。

愛研の会員の皆様には会報誌の遅れなど年度末・年度頭初のゴタゴタなどで多大なご迷惑をかけた。今年度からは、常務理事も明確な役割分担をし、先生のご遺志を実現するべくより一層の努力を致します。会員の皆様呉々もご理解の程宜しくお願い致します。  
(杉浦)

愛鳥教育 No. 25・26 昭和63年3月31日

発行人 下田澄子  
発行所 全国愛鳥教育研究会  
住 所 〒150東京都渋谷区宇田川町37-10  
渋谷レジデンシャルオフィス405  
(財)日本鳥類保護連盟内  
電 話 東京03(465)8601  
郵便振替 東京2-92041  
制 作 かなえ書房